

議事概要

会議の名称	令和5年度第1回三田市総合教育会議
開催の日時	令和5年12月26日（火）14時00分～15時30分
開催の場所	三田市役所本庁舎601A B会議室
出席した委員の氏名	田村克也市長、鹿嶽昌功教育長、大野裕己教育委員、中野文雄教育委員、三木尚美教育委員、中村勇人教育委員
出席した職員の職及び氏名	〈事務局〉 西垣戸子ども・未来部長、浅野学校教育部長、喜多子ども未来室長、横溝子育て応援室長、松下すくすく子育て課長、神影健やか育成課長、藤田幼児教育振興課長、田中学校教育課長、久後幼児教育振興課参事、増田幼児教育振興課副課長、西すくすく子育て課係長、堀川学校教育課係長、差尾すくすく子育て課主任
傍聴人の人数	2名
議題	① 三田市の不登校問題等について ② 三田市立幼稚園再編計画の進捗状況について
会議の概要	P 2 ～ 1 3
公開・非公開の区分	公開
使用した資料	本日の次第、座席表、出席者名簿 【資料1】三田市の不登校問題等について 【資料2】文部科学省「誰一人取り残されない学びの保障にむけた不登校対策について」 【資料3】文部科学省「不登校・いじめ緊急対策パッケージ」 【資料4】三田市不登校緊急対策パッケージ（案） 【資料5】三田市立幼稚園再編計画の進捗状況について
連絡先	子ども・未来部 子ども未来室 すくすく子育て課 電話 (079) 559-5079

会議経過

1. 開会

【喜多室長の司会により開会、配付資料の確認等】

【傍聴者9名】

【議事進行を田村市長に交代】

【市長挨拶】

2. 議事

(1) 三田市の不登校問題等について

田村市長：協議事項「三田市の不登校問題等について」、事務局から説明をお願いします。

(田中課長から説明) … 資料1～4

田村市長：ご質問、ご意見を聞かせていただく前に、少し説明いただきたいところがあります。

先ほど2ページで説明してもらいました、三田市における、いわゆる主な要因というところで、他市町比で少し多くなっている、本人に関わる状況で無気力・不安というのは、例えばどういう不安だということか、無気力というのはどんな状況、状態の無気力なのか、説明できる範囲でお答えいただければと思います。その上で皆さんにご質問等々を展開していきたいと思います。

田中課長：どういった状態が無気力で不安なのかというのが、こちらのほうも多種多様であり、これが無気力である、これが不安であるという部分が決まっていないというの、課題の1つとなっております。なかなか不登校になっている子どもたちにその要因を尋ねましても、子どもたち自身が分からない状況、学校に行こうとするのだけれども、なかなか学校に足が向かないという状況も含めまして無気力・不安ということで、学校のほうは調査分析をしております。また、何となく学校に行くのが不安であるということも、この無気力・不安には含まれておりますので、先ほども申し上げましたように、一体どういったものが無気力・不安なのか、これをしっかり学校のほうで調査しまして、支援に結びつけていく、ここに大きな課題があると、事務局のほうでも考えております。

田村市長：国の統計の取り方ですが、定められた中で運用していると思いますが、個人的には、不登校の生徒ではない方も、やはりいろんな不安は全員持っているはずだし、多少の無気力というのは皆さん持っているのかなと思います。そういう意味では、いじめや学業不振、親子の関わり方、それ以外のものをその他として無気力、不安に入れているという意味合いなのか、その辺が、どうなのか。田中課長から説明がありましたように、そこをしっかりと三田市の教育委員会として、分析というか寄り添っていくというのが大

事なのかなと思いましたので、この不登校問題等について質問させていただきました。
これについてご質問またはご意見をお聞かせいただければと思います。

大野教育委員：今、田村市長も挙げていただいた2ページ目、2の要因のところですね。ここで挙げられた、表でまとめられた調査結果の回答者については、学校や教員がお答えになられたということでしょうか。

田中課長：そのとおりです。

大野教育委員：情報があるならばお伺いしたいのですが、家庭で要因ということでは学校も見極められて、こういった結果になっているのだろーと思いましたが、例えば子どもさん、あるいはご家庭の側で、学校に行きにくい状況がある中で、こういったニーズをお持ちであるなど、市の教育委員会のほうで把握されていることがあれば、少し教えていただければと思います。

田中課長：教育委員会としましては、不登校状態にある児童生徒の保護者の方々のニーズを、直接把握しているということはありません。あくまで学校が不登校にかかる要因等の人数を確認しているということです。

大野教育委員：そのあたり、学校が認知されているということは問題ないのですが、ご家庭等の側において、こういったニーズもあるといった追加の情報をいただけるならば、少し教えていただきたいと思ひます。

田中課長：よく聞かれますのが、いわゆるICTを活用した事業支援や、あとは先ほど申しあげました民間施設ですね。民間施設の情報を何とか知りたいということをお聞ひしております。

大野教育委員：ニーズも受け止めながらご説明いただいたということが、改めて分かりました。ありがとうございました。

中野教育委員：三田市の現状がほぼ全国と変わらないということが、今日の説明を受けた中で分かりました。その中で、やはり令和二年のコロナ禍のことが引き金になっている。いわゆる、三田市はそれまではそう多くなかったのだけれども、顕著に現れてきたのがその時期からであるというところから、やはりその部分をどう分析していくかということが、とても大事になってくるのではないかなと思ひます。コロナ禍で学校がほとんど閉鎖になり、そして外に出ることができず、家庭外での対人関係が減少することによるストレスなど、そういう中で、不登校だけではなくて生徒指導上の問題も、たくさん出て

きているのではないかなと思います。今現れている結果の原因が何なのかをしっかりと分析をした上で、対策を練っていくということが必要かつ重要であるとともに、やはりその中の原因は何かを、分析していかなくてはいけないように思います。学校教育課としてはどのように分析されていますか。

田中課長：確かに、まずコロナ禍が一定の影響を及ぼしているのではないかということは、学校教育課のほうでも考えております。先ほどもありましたように、やはり子どもたちが学校を休むということに対してのハードルが、非常に低くなっているということも考えております。その中で、先ほどご意見いただきました対人関係については、コミュニケーション不足や、そこから発生するトラブルも、毎月の問題行動報告には少し出てきております。やはりコロナ禍で、子どもたちが直に語り合う機会や体験が少なくなっていることも要因となり、様々な問題行動が起こっているのではないかというのは、一定は考えております。

中野教育委員：ありがとうございました。子どもたちにとって学校というのは、行かなければならないというのが、以前からずっとあった概念だったと思うのですが、コロナ禍で、学校に行かなくてもいいという選択肢が出てきた。これが子どもたちにとっては新たな価値観となり、それが大きく影響しているということも、原因の1つに考えられると思います。いわゆる休むことに抵抗がなくなった。これは子どもたちだけでなく、保護者も地域も同じなんです。そういう中で、子どもたちが今何を求めているかということを考えていくと、やはり子どもたちのコミュニケーション力をどうしていくのか。いわゆる個別で最適な学びというのは手段であって、その前の段階で、子どもたちにどのような環境を提供していくべきなのかということを考えていく必要があるなというふうに思いました。その表れが無気力であり不安であると、自分がどうしていけばいいのかということがもう分からないという部分があるのかなと思います。令和5年の全国学力・学習状況調査、これは分析をする上でとても大事な、子どもたちの実態だと思います。この中を見ても、三田の子どもたちというのはとても自尊感情も高いし、やはり社会的にきちんと判断ができる子どもたちがたくさんいます。学校で学ぶことによって、自己選択ができる力が自然と身につけていって社会的に自立をしていく子どもになっていくのではないかなと思います。そういうところから考えると、現状としては不安が多い。本来子どもたちが、自然に子どもたち同士の中で学べるようにハードルを低くしていくような、いろんな施策というのが必要になってくるというふうに思いました。今、COCOLOプランも説明がありましたけれども、やはり子どもたちにとって何が必要か考えていくことが、今大事であると思います。

中村教育委員：まず、なぜ不登校なのかというようなことを質問されたときに、うまく自分の気

持ちを言葉にできないというのは、子どもだけではなくて大人もあると思うのです。そこをひっくるめて不安とか無気力という回答、結果になってしまっているのではないかなとは感じました。うまく気持ちを引き出してあげるとか言葉に持って行ってあげるといのは必要なかというふうに、少し思いました。質問ですが、対策のほうでスペシャルサポートスタッフの設置とありますが、時間の拡充や配置の拡充になるのだと思うのですが、そのスペシャルサポーターとして任命される人材というのは、学校に対してどれぐらいの割合が今、見込めているのでしょうか。

田中課長：まず、中学校につきましては、子どものサポーターを中学校8校に全て配置をしておりますので、今後この方々が中心となって、スペシャルサポートスタッフとして、サポートルームの運営にも携わっていただけないかと考えております。小学校につきましては、現在4校に支援員を配置していますが、これにつきましては現在、まだ見込みの段階であり、今後検討していく必要があると考えています。

中村教育委員：ありがとうございます。やはりカウンセリングするほうも、1人1人への対策ということになると負担が多かったりとか、そのカウンセリングする側の精神的負担というのいろんな話の中では聞いたりするので、そこのフォローも必要かなと思ひ質問させてもらいました。ありがとうございます。

三木教育委員：不登校の様々な今の問題で、三田市も全国と同じように増えていると報告がありました。やはり先ほどからもお話が出ていますように、コロナ禍が機になって、学校に来なくていいハードルが下がったということも、大きな要因になっているのだらうなと思います。その流れでICTの活用としてタブレットが配布され、個別に1人1人が学べる環境ができました。やはり学校でみんなと学ぶのとは異なり、それぞれ個別に学べる環境として、個別支援という意味ではとてもいい環境になってきていると思います。その分、何か1人1人に学びやすい環境ができたことによって、家でも学べるという意味では、休んでも家で学べるという環境も広がってきているのかなと思います。先ほどの説明の中で、1人で悩みを抱え込まないようにということが、やはり本人も親御さんも大事かなと思います。相談窓口の整備ということですが、現在どのような相談窓口になっているのか、教えていただけたらと思います。

田中課長：現在は、相談窓口という名称のものというより、あすなる教室に保護者が来られて相談をされる、もしくは青少年育成センターに相談に行かれるというような形で、相談窓口が様々あるというのが実際です。保護者の方にはなかなか分かりづらい部分がありますので、そこは関係課と連携しながら、今後その相談窓口というものを、いかに保護者の方に分かりやすく示していくのかを検討していく必要があると考えております。また、

三田市の不登校緊急対策パッケージに設けております相談窓口としては、あすなろ教室の中にオンラインもしくは対面で相談できる場所を設けて、保護者の方への支援を充実させていくというものを考えております。

三木教育委員：ありがとうございます。やはりそういう相談窓口があるだけで安心できますので、しっかり周知をしていただいて、そのような体制をつくっていただけたらと思います。

田村市長：ありがとうございました。それでは、ここからは協議という形に入らせていただきます。先ほど委員の皆様から様々なご意見やご質問を伺いましたけれども、まず1つ目に不登校などの問題を解決するためには、教職員が子どもたちや保護者と向き合う時間を確保することが重要ではないかと思っております。今の学校現場はとにかく忙しいと皆さんからお聞きします。教職員が本来すべき教育活動に専念できる、子どもたちとよりよい環境をつくることで困っている子どもたちや保護者への適切な支援につながると私は思っているのですが、皆さんのお考えはどうでしょうか。2つ目に、私も子どもが3人おりますが、例えば、不登校、学校へ行くのが嫌だと聞いた瞬間に、やはり親もすごくショックで、不安になると思います。親がどこまで寄り添えるかということだと思います。先ほど言ったように教師も忙しい、親も忙しい、働きながら子育てしている人が多いと思うのですが、そうすると、親もすごくショックで不安になるし、仕事もあって忙しい。子どもの本音に寄り添うには、どこまで寄り添ってあげていいか、どこまで聞いていいかという恐怖心と、一方では、子どもに聞くと余計に逆効果になるのではないかというような、いろんな気持ちが錯綜してくるのが、多分保護者の気持ちだと思います。子どもが、実際ここにあるように、友人関係を巡る問題について不安に思っているのが最初で、友人関係がしっくりいかないから無気力になっているのか、学業の不振、ちょっと数学が難しくなってきたから何か不安になって行くのが嫌だとか、何かその要因をしっかりと、やはり捉えるというのが教育委員会の立場かなと私は強く思います。ここはこだわっているところなのですが、それと冒頭に申しあげたように、学校の先生が教育に専念する環境を三田市としてはしっかりとつくっていかないといけない。先生は、先生になった理由、子どもたちをしっかりと教育したいという理念を持って、そこが薄れるような教育体制に今なっているのであれば、全国的な傾向とはいえ、三田市としてはしっかりとそこに対峙してやらなければいけないと思います。私はその2つのところを大切にしながら、不登校にこれから取り組んでいかなければいけないと思っています。皆さん、ご意見を再びお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

中野教育委員：今、市長のほうから、まず教員の多忙化という部分で、今の学校現場の中では、本当に子どもと向き合う時間がないのかというところで話がありました。いわゆる勤務時間の適正化等も含めて、やはり教員のライフプランの中でゆとりを持って子どもたち

に関わるということは、もう数年来取り組んでいることで、以前に比べれば子どもと関わる時間は増えてきているのではないかなというふうに思います。いわゆる事務量、例えば出張といった回数も以前よりは少なくなっているのではないかと見ていて思いますし、私も現場にいるときにそういうふうなことを感じました。ただ、何がしんどいのかというと、やはりどうしていいのか分からない先生が増えてきているということが1つ。これが多忙化であると同時に、その中に見え隠れしている教員の不安というものも、とてもたくさんあるのではないかなと思います。例えば、いろんな課題のある子どもたちへの関わりがあると思います。その1つの中に不登校、学校へ行きにくくなってきている子どもへの対応があると思います。自分がどういうふうに関わればいいのかという部分が、とても不安になってきています。この不安が、いわゆる精神的な負担に伴う多忙化が教員のしんどさにつながっていく、大きな影響を出している部分の1つではないかなと思っています。いわゆる組織の中で、学校の中で解決できないこと、例えば他の組織、あるいは機関とどうつながればいいのかという部分を教員がきちんと理解していれば、不安というものは少なくなってくると思います。本当に1人1人を見て大事に、現場では指導をされていると思うのですが、その中で困ったときの対応についての見通しや指導の方向性が持てない状況が多いと思います。例えば教える技術であれば、教育研修所へ相談すれば指導主事がいて、いろんな研究会の資料を見るなど、いろんな手だてがあるのですが、いわゆる子どもたち1人1人にどう向き合えばいいのか、どう関わればいいのかというのは、なかなか相談できる場所がないのです。先輩に聞くとか、校内でいろんな話を聞くとかいうことはできますが、専門機関等のつながりは、やはり1つ大事なポイントになってくるというふうに思いました。だから本当に忙しい中で、もう自分でどうしていいか分からない教員の悩みが、その忙しさの中心になりかけているような気がします。2つ目の不登校という部分に焦点を当てていけば、やはり相談機関をきちんと体系づけるということが今、必要になってきていると思いました。まず保護者が最初に不安に思われることは、市長のおっしゃったとおりだと思います。うちの子が「行きたくないねん」と言ったら、「どうしよう」、もうそこからなのです。「何で」と言って始まるわけですよ。「どうして」、「何で」、もうそうになると子どもは後ろに引いてしまう。そして、だんだんに行かないという方向になりかけていく。そこで、保護者がどういうふうにしてその不安を解消していくのか、それもやはり学校とともに連携しながら、その不安の解消に向けた組織的対応ができる環境が必要だと思います。だから校内の支援センターというのはその拠点になっていくと思います。そして、周りの専門的な組織とつながる組織的環境をどう構築するかが大切です。まず困ったら学校の先生に相談したらいいが、しにくい場合は、市のここへ相談すればいい。そのように、相談できる窓口をたくさん広げ、その中で情報を常に共有できるようなシステムというものが、今とても大事になってくるのではないかなというふうに思いました。

大野教育委員：今年度コロナが5類移行により、私たち教育委員も学校訪問できるようになりました。学校側の頑張りとかを見せていただくことができました。各学校を回っていきますと、子どもにやや通学しにくい状況が見られた、ちょっと行き渋っているかなぐらいのときから、先生方がチームでアセスメントを行ったりして、子どもや家庭の対応をしていくという姿を見てきて、やはり小さな芽から、きちんと学校として対応したいというところを見てきたところです。やはり学校側も危機感を持って、子どもにとってよりよくというふうに頑張られている姿勢を援助するという点で、三田市の対策も進められていけたらいいのかなと思っています。やはり学校の先生方の世代交代が進んで、若い先生も増えてきておられます。そうした中で、大学の養成教育も頑張れというところなのですが、やはり先ほど中野委員もおっしゃったように、なかなかどう対応していいかという不安感があると思います。あと一つ大切なのは、専門機関とつながっていくところもそうですが、やはり学校の中のチームでアセスメントをして、支援が必要なお子さんを見ていくことが求められるのかなと思います。世界的に見れば、先生方が授業に専心する設えになっている先進国では、ソーシャルワーカーさんも学校に常駐されていて、そこでそういった対応やお願いができるということもありますが、今の学校の現状でいくと、やはり先生方が他の機関の力も借りて子どもたちの見立てを行っていくということを大事にしないといけないというふうに思います。そうしたときに、外側につながるだけでなく、先生方が他の先生とチームになって、ソーシャルワーカーさんの問題の解決の見通しやスキルといった支援を受けながら、解決の方策をその子どもたちに対して見出す、そして解決ができたという効力感を持っていくというようなところを、大事にしていただければと思います。2つのことが言えると思います。1つは、先生方の業務が今とても重くて大変であるので、抜本的な手だてを講じて、勤務時間の適正化を図らないといけない。減らすということも、当然今は大事です。ただ、その中で減らしていきながら、片方では大事な職務、向き合う職務として、そうやってチームで対応していくということもとても大切だという「観」をつくっていく必要があるのかなと思います。そして、あともう1つは、先ほど三田市のプランというところでおっしゃっていただいたように、保護者も不安を持たれているということは当然あって、支援が必要だということもデータで教えていただきました。あすなろ教室におけるソーシャルワーカーさんの配置で、家庭のアプローチということを確かに行っていくことも大事です。そういったソーシャルワーカーさんがあすなろ教室と、中学校にもいらっしゃるのですね。中学校区内ということで小学校に行くことが、今は難しい部分もあるかもしれないけれど、小中一貫の取組の中で、取組を進めてきた中学校のソーシャルワーカーさんが見立ての仕方を小学校に伝えるなど、あるいはそういった専門家の方々が学校にもアプローチするなどによって、学校のチーム対応支援を拡充していくことが大事であると思いました。こういうところを、今おっしゃっていただいたプランの中にもより位置づけて、先生方における解決を支援していただきたいと思いました。

田村市長：ありがとうございます。チーム支援とソーシャルワーカーを含めた対応や保護者の不安の解消をやっていくということでした。今、大野委員がおっしゃった中でお聞きしたいのですが、抜本的な対応が必要だというのは、例えばどういうイメージ感で考えられるのでしょうか。私もそれは必要だと思います。いわゆる行政の負担を軽減するにおいて、優先順位の低いものを見直していくということだと思っておりますが、どういうイメージか教えてください。

大野教育委員：今日申し上げた抜本的というところでは、私たちが参照できる資料で、国のほうでも学校で主に担う業務と、学校外との連携・協力を考えていく業務といった分類はされていますが、抜本的といったときには、そこをもう少し掘り下げる余地もあると思います。1日の仕事、あるいは1年の中での仕事ということ自体では、もう業務改善では、兵庫県でも10年以上やってきていますし、三田市でも、かなりいろんな業務を削減していると思います。そのうえで抜本的な意味では、もう少し1日単位とか1年単位の学校で扱っている仕事をもう一回ゼロベースで見直し、再構築してみるということは、まだ余地があるとも思っています。そのうえで、今まで出てこなかった学校に負担感が重い業務とかが洗い出されて、他の外部的な支援とか、あるいはコミュニティースクールとか、そういったところへ理解を得ながら、検討できる余地があるのかなと思います。そういう意味では、見える化ですよ。学校の業務自体はかなり広く、多く、年間通じてというものにもかなりのものがあるので、その辺りもう一度見直してみるということはあると思います。他市でもそういったところから取り組まれているところがあるというのが念頭にありました。

田村市長：ありがとうございます。今委員がおっしゃったことは非常に大事なことだと思っています。先日神戸三田ホテルで、神戸新聞の懇話会で話したのですが、私は銀行にずっといまして、銀行は半年ごとの目標設定があって、31年間勤めて62回、半年、半年で勝負していっています。ある意味実績をいろんな形で上げてきたのですが、やはりマイルストーンを置いていくというか、半年スパンで物事を考えていく、委員のおっしゃったことに関連して言えば、半年、1年後をどうあるべきかというのを、どこをどれだけ計量化するかというのを共有化して、その目標に向かって定量的に学ぶ、数字で表れない定性的なことを実現していくにはしっかりとビジョンが必要だし、期限を切って共有することが非常に大事だということを、私は銀行で、多くの銀行員に示して教えてきました。そうすると、今の委員のお話で、その抜本的な中の1つとして今、いろんな見直しがあると思うのですが、その辺りいかがでしょうか。教育委員会のほうで見直しをしないといけない、改めて例えば部活の地域移行だと一部具現化していている部分があると思うのですが、細かい積み上げによって軽量化していくという考え方なのか、大きなところをもう既に見直しているから、細かい見直しは今行わないというの

か、その辺どうなのでしょう。

浅野部長：今のお話なのですが、文部科学省から既に平成31年に、学校が担うべきもの、あるいは外部に依頼できるものについて大まかに示されており、それ以降教育委員会としても、あるいは兵庫県教育委員会もそうですが、見直しを積極的に進めてきております。先ほど中野委員もお話になりましたが、随分、学校の改革、改善というのは進んできております。そのため今あるものについては、本当にこれを改善すべきなのか、これを改善してしまったら、子どもとの間にある様々な指導にまで影響がやはり出るのではないかという、その境目にあるところの問題が残ってきていて、明確に省略できるものについては、ほぼほぼ省略できています。ただ、もう一つあるのは、省略がやはりできない、これは例えば地域との関係があったり、あるいはこれまでの流れがあったりして、これをなくすと、学校としてなかなか地域の理解が得られないといったところは当然残ってきております。ですから、やはりそういったところにもメスを入れるのかどうかという判断は、1つ残っていると思います。あと、業務改善の中で言いますと、業務改善というのはただ単に減らすだけではなくて、やはり教職員のスキルアップとセットでないと駄目だと思っています。ですから、教職員のスキルアップというものをしっかりする一方で業務を減らして、そしてしっかりと子どもたちのほうに専念する時間を蓄えて、集中することが必要だと思っておりますので、そういったことを総合的にやっていかなくてはいけないかなと考えております。

田村市長：ありがとうございます。既に見直しを進められているとありましたけれども、これは常に見直していく必要が私はあると思っています。この間もどこの会議で話をさせてもらったのですが、例えば、保育業務でも、先生が子どもと交わらない時間を、プラスで週に1時間、2時間つくってあげることによって、ちょっとストレスとかが減っていく、業務に余裕が出てくるのではないかという定性的な取り組みと、保育でも先生の休み時間に、子どもと接する時間を休み時間に入れていたりするので、その辺のところの定量的な改善とか見直しなどを含め、学校教育において何かないのかなということも併せて検討いただきたい。これは私の思いというか、意見です。

中村教育委員：私は、保護者です。子どもが小学校にもいますし、高校にもいます。先ほどもお話があったのですが、もし子どもが学校に行きたくないというようなことになったときに、では自分だったらどうするかなというふうに考えると、やはり出てくる言葉は、恐らくどの保護者さんも考えていることだと思うのです。一旦行きたくないのだったら行かなくてもいいという選択肢は出てきてしまうと思うのです。なぜなら、やはりどこに相談したらいいのか分からないからだと思うのです。学校に言っているのか、ではどこに言っているのか。ですから、そういう相談すべき窓口というのは、常に分かる状態

のほうがよいのかなと思いました。ここに聞いたらいいとか、こういう流れで支援が受けられるとか、そういうのが今だと分からないなというのは思っています。あとは、先ほど先生のスキルアップに時間をとるというような話があったのですが、私も会社員として、やはり目の前の毎日の業務だけに追われてしまって、1年後、2年後に振り返ったときに、日々の業務しかしてないと思ってしまうことが結構ストレスで、自分の成長を感じられないという部分が、メンタルにはあまりよくないのかなと思います。例えば、先生が毎日の業務に追われてしまって、何か積み上げるものというのができないという部分がメンタルに響くのであれば、そういう成長する時間を確保できたらいいのかなというふうにも思いました。

浅野部長：スキルアップということで今、委員からお話があったのですが、実はそのスキルアップと簡単に言っても、個人ですること、チームとして学校組織ですること、関係機関と連携をして進めるものがあり、それぞれ異なります。大切なのは、そういったことをするにしても、今、実は学校の規模がすごく小規模化しており、教職員が学ぶ手本となる教職員に限られてきています。たくさんのモデリングがあれば学ぶ機会もあるのですが、教職員の数も減っていますので、複数年勤務しても、ほとんど教職員の顔が変わらないということがあります。学校規模が大きければ教職員も学ぶ機会、いろんなモデリングを見ますので、そういったことを知ったり挑戦したりという機会がございます。そういったことから、世代交代をもう少しうまく効率よく、我々としてはしていきたいのですが、やはり限界があります。教育委員会としましては、しっかりと教育研修所を中心に取組んで参りたいと考えております。また、職場で子どもたちの顔をしっかりと見ながら、同じものを見ても受取り方が違えば、やはり対応も異なってくることから、個人、チーム、そして関係機関としっかりとつないでいくことがトータルでのスキルアップだと思いますので、教育委員会としてはその点に力を入れていきたいと考えています。

田村市長：不登校の問題については、三田市において国・県同様、喫緊の課題です。近隣市町で熱心に取り組んでいる市町もありますし、三田市も熱心に取り組んでいるというふうに思われていますが、一層取り組んでいかないといけないと思っております。今日、説明のあった三田市の不登校緊急対策パッケージの取組を含めまして、三田市全体で子どもや保護者への支援を充実させるように、本日委員の皆様から頂戴しましたご意見等々を参考にしながら、また加えるところは加えながら、取組を進めていっていただきたいと思っております。次に、報告事項の(2)の三田市立幼稚園再編計画の進捗状況について、事務局から説明をお願いします。

(2) 三田市立幼稚園再編計画の進捗状況について

(藤田課長から説明) … 資料5

田村市長：ありがとうございました。

中野教育委員：これまで再編の計画について議論、そして検討してきた結果、今、徐々にその形が表れてきているなというふうに、よく分かりました。そのような中で、具体がどんどん見えてくると、何か調整しなくてはいけないこともまた出てくると思っていますので、そういう点をまたしっかりと見直していただきたいと思えます。特に再編した場合、この跡地の問題もあるのですが、地域のシンボリックな幼稚園であった場所が、一体どういうふうに次に活用されるのかも含めて、新しい認定こども園と、そして従来からあった幼稚園の跡地活用と、並行しながら地域との対話を進める中で、ニーズに合ったものを考えていただければうれしく思います。以前この計画についての審議のときに話をさせていただいた、いわゆる複数の幼稚園が一緒になる、そして認定こども園ができる。今度はそれぞれに分かれて校区の小学校に行く。そしてまた中学校にというふうに、一緒にいて、分かれて、一緒になるという流れの中を考えると、やはりその中の連携がとても大事だと思います。学びの保障ができる流れをお願いします。そして今、不登校の問題、発達上の課題の問題、就学指導も含めてですが、円滑にその情報がきちんとつながっていくようにしていただくということが、本当に大事になってきます。それがあって初めて再編をしてよかったなというふうになると思っていますので、そういう部分でのソフト面の環境を整えていただきますようお願いしたいと思います。

田村市長：ご意見賜りました件につきましては、参考をお願いしたいと思います。

三木教育委員：これまで地域の方々と話し合いをきめ細やかにされ進めてこられた計画が、このように進められているということがわかりました。新しい認定こども園ができるという中で、預かり保育が長くなるのだと思いました。預かり保育が長くなるということは、やはり保護者の働きやすさという面ではよい方向に行くのかなと思います。逆に、子どもの目線からしますと、やはりその分、家庭よりも園で過ごす時間が長くなりますので、より園の環境を安心ある場にしていただければいいようにお願いしたいと思います。中には支援の必要な子どもさんもいらっしゃると思うのですが、小さいときから園でもインクルーシブの視点を持っていただいて、少しでもそのような環境づくりをお願いしたいと思います。より小さい子どもさんが入ってくるということにもなりますが長年のご経験を活かしていただきユニバーサルデザインも取り入れていただいて、多様な子どもたちみんなに分かりやすい環境づくりを意識することが大事だと考えます。不登校のお話がありました、やはりそのような環境作りも子どもにとっては安心材料になると思います。

中村教育委員：通園バスにも職員が同乗するというので、また今お話にあったように、預かり保育も遅くまでということなので、職員の長時間の負担というのが、逆にその子どもた

ちへの負担になったりとかしないように気を配っていただけたらなと思いました。先ほどの地域との関わりという面も、関わる地域が広がることによって、先生の勤務時間や勤務内容の増大みたいなことにならないように、フォローしていただけたらなと思いました。

大野教育委員：今までの幼稚園には、地域も大切に関わってきて、資源の活用をされて子どもの教育に生かしてきたので、持続することも大事ですし、認定こども園ということでも諸条件面の制約はあるかと思うのですが、やはりそういった良き伝統そのものを生かしていただきたいというのが1点。それから、とりわけ認定こども園ということになると、方針として大事になる保護者の子育て支援の充実をやはり丁寧にしていきたいと思えます。保護者が手を重ねて、よい子育てができたという効力感が持てるように、初めて通わせる学校園ということになりますので、そういった点を今回の再編の中で、改めて大切にいただき、よい三田の学校教育をつくっていただけたらと思えます。

田村市長：ありがとうございます。それでは、市立の認定こども園を設置することで、一定の集団規模を継続的に確保していき、園児の健やかな育ちの保障や若者世代の定着など、農村地域の活性化が図れるように努めてまいりたいと思っております。先ほどの不登校と同様、ただいま皆様から頂戴しましたご意見等を踏まえまして、三田市認定こども園運営方針等検討委員会のご意見等もいただきながら、事務局は引き続き、丁寧に再編計画を進めていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。以上で、本日予定しておりました議事は全て終了いたしました。本日は皆様からの活発なご意見を頂戴しまして、厚く感謝申し上げます。ありがとうございました。

喜多室長：皆様におかれましては、長時間にわたり熱心にご議論いただきました。また、貴重なご意見をいただきました。本日は誠にありがとうございます。これもちまして会議を終了させていただきます。